

フランスにおける大学入学資格試験制度の近代化過程

——デュルユイ文相の改革を中心として——

宮 脇 陽 三

内容目次

- 一 デュルユイ文相の改革の目的
- 二 文学大学入学資格試験
- 三 科学大学入学資格試験
- 四 試験 方法
- 五 デュルユイ文相の改革の結果
- 六 デュルユイ文相の改革の影響
 - (一) シモン文相の場合
 - (二) ド・クモン文相の場合

一 デュルユイ文相の改革の目的

デュルユイは一八六三年六月二四日に皇帝ナポレオン三世から文部大臣に任命された。かれの文相就任とともに、「公教育問題は政府の重大な関心事となった」(9,128)のである。かれは文相就任前に、文

フランスにおける大学入学資格試験制度の近代化過程

部省視学官として官公立学校の職員監督と教育課程問題を担当していた。それゆえ、かれはフォルトゥル前文相以来の懸案になっていた教育問題の重要性を、十分に知り抜いていた。デュルユイは文相就任直後の六月二九日に、官立中等学校における哲学級の名称と任務を復活させた。同時にまた、かれは「官立中等学校哲学科教授資格試験」(Lettres)も復活して、哲学科教育の権利と名誉を回復させた。かれはフランス高等教育をたんなる弁護士、医師、薬剤師養成所から脱皮させるためにも尽力した。

デュルユイは帝国公教育評議会において、かれの教育行政の基本方針を、次のように述べている。「皇帝は人物を陶冶せよと、われわれに要求している。決してたんなる大学入学資格免状取得者を養成せよと要求しているのではない。」(9,114)

一八六三年八月六日の皇帝への上奏書の中で、かれはさらに補足説明している。「わが国における農業従事者は二千四百万人、工業、商業従事者は一千二百万人である。わが国の中等教育は、たんなる機械

工や指物師を養成するのではなくて、実務従事以前に道徳的精神を啓発しなければならぬ。

わが国の近代工業は伝統的技術とともに、それに匹敵するくらいの近代科学技術の成果を取り入れている。それゆえ、われわれはわが国の未来の工業従事者の精神を啓発し、その品性を高尚にするように努力しなければならない。

もちろん、現状ではこれらの教育、とりわけ既設の官立中等学校教育は惨めな悲しむべき状態にある。官立中等学校は、いまや新しい精神と新しい人間を受け入れる必要がある。ほんの少しの資金と、多大の配慮とによって、この遺憾な状態に終止符を打つことができるのである。

フランスはまさに世界の道徳的中心地である。それゆえ、フランスは富裕者階級の子弟、自由職業人、つまり才能、家柄、財産によって社会の最上層階級へ進む予定者に対して、教養貴族主義を強化する必要がある。なぜなら国民大衆は文学、科学、哲学、歴史学の学習によって、高尚な趣味を持つとはしないからである。民主主義は滔々と普及しつつある。われわれは民主主義の正当な対価である知的教養を与えるために、幅の広い多産的な精神の教養を確保する必要がある。

われわれは初等教育を尊重し普及に努める。われわれは国語中心の中等教育の広汎な普及によって、国民大衆の道徳水準の向上に努める。われわれは古典課程中等教育を厳格に編成し、高等教育の怠慢を鞭撻することによって、有産市民階級の道徳水準を向上させることができる。国民大衆は日まに社会的地位と生活水準を向上させてい

る。有産市民階級も現状のままに停滞しないであろう。なぜなら停滞は下降を意味するからである。

女子教育に対する配慮も大切である。なぜなら婦人は子供の出産日と、子供の最初の教育とにおいて、二度母親になるからである。それゆえ、われわれは女子教育制度を組織する必要がある。わが国における現在の社会的混乱の原因の一部は、われわれが女子教育を現在の時勢にも適合せず、またわが国に所属していない人びとの掌中に委託してしまつて放任していたことから生じたのである」(9.116)。

中等教育および大学入学資格試験に関するデュルユイ文相の信念と教育行政の基本方針は、次のような措置の中に認めることができる。

(一)一八六三年九月一二日付裁決によって、中等教育の文理科履修分岐を第四学級から第三学級へ移行し、それに終止符を打った。(二)医学部進学者用の限定科学大学入学資格試験を除く、その他の無用な科学大学入学資格試験を廃止した。(三)学問中心の高等教育とは必然的な関係をもたないが、その数と活動、また国家の勢力と安定性に対する影響力からみて重要な、職業活動と社会活動に適應する「中間的教育」を一八六五年六月二六日に「専科課程中等教育」(Logit)の名称によって実現した。

デュルユイ文相の中等学校教育行政方針は、次の三点に要約することができる。第一に中等学校文科生徒の知的教養を、これまでよりも調整し強化した科学教育によって補強した。第二に理科生徒の知的教養を科学教養と結合した古典科目の一カ年教育によって補強した。デュルユイは、中等教育修了認定免状は、文学または科学の大学入学資

格免状のいずれであっても、真に中等教育修了を認定し、古典（全人）教養の名称にふさわしいものであるためには、文学専修とか科学専修であつてはならないと考えたのである。第三に新設の専科課程中等教育は、一部の生徒に対しては旧古典課程の代替となり、また若干の程度の差はあるとしても、古典課程中等教育と同じ役割、つまり精神の一般教養に貢献するように要望された。同時にまた専科課程中等教育は特定の職種や職業への準備となるように、ある程度の専門的性情を保持するようにも意図された。その意味では専科課程中等教育は中等技術教育と同一視してもよいと考えられる。それは、初等教育が養成した産業労働者軍に対して、中堅幹部である職工長を供給するため、四カ年の修学期間中の半分の時間を「実務科目」(4103)に配当していた。これは全く新しい一般教養理念の登場であつた。

専科課程中等教育においては、厳密な意味での職業訓練よりも、むしろ職業準備教育が問題であつた。一八六六年四月一六日にデュルユイ文相は専科中等学校における手労働中心の教育精神を述べている。「手労働は何かの道具を取り扱う習慣を養ふこと以外の目的をもつものではない。生徒は一つの職業をおぼえることが問題なのではない。生徒の手がハンマまたはヤスリ、カンナまたはバイトを握つて鍛えられ、徒弟修業の仕事のために準備されること、同様にまた精神が事務所または研究室の仕事のために準備されることが目的なのである」(566)。このような目的によつて専科中等教育教授資格試験が制定され、専科中等教員養成のために、クリュニーに専科師範学校が設置された。さらに翌年の一八六六年には最初の官立専科中等学校がモン・

ド・マルサンに開設された。女子中等専科講座もデュルユイ文相の在任期間中に約四〇都市で開設された(686)。

デュルユイは大学入学資格試験が中等教育水準を認定し、規制するために役立てられなければならないと考えていた。かれは、一八六三年一〇月二四日付の大学区総長宛の通達の中で、そのための措置を具体的に述べている。「文部大臣は、大学入学資格試験の期間中に少なくとも一回は、文学または科学の大学入学資格試験において全学部が受験者に同日、同時間に実施する筆記試験の問題を全大学区当局へ送付する。試験委員会は口述試験後または試験委員会による合否判定発表後に、全答案を成績順に分類し、受験者ごとに留意点と所見を記入して文部大臣へ送付すべし」(646)。

しかしデュルユイ文相は大学入学資格試験受験者全員に、同一の筆記試験の問題を課すことによつて、大学入学資格試験の統一を求めようとしたのではない。かれは、中等教育の改善ならびに大学入学資格試験にふさわしい監督の観点から評価し比較するための、最も確実な資料を収集しようと思つたのである。

各大学区から文部大臣へ送付されてきた答案は、視学官と大学教授から構成された大学入学資格試験専門委員会へ提出された。この専門委員会は、文部大臣がこれまで試験方法や試験内容を政策や伝統によつて変更していったのを廃止し、それに代つて教育学の原理にしたがつて運営して行くことを検討するために設置されたのである。

専門委員会は各試験期ごとに提出された答案を入念に検討した。その結果、一八六四年一月二七日の布令、同一月二八日の規則、一

八六五年三月二四日の規則によつて、大学入学資格試験は今後、「リセ修辞学級、哲学級、基礎数学級において教授される教科内容についてのみ出題すべし」(10, 267~268)と規定された。この措置は大学入学資格試験の試験方法と試験内容が官公立学校教育団体設置当時の基本理念に復帰したことを示している。

デュルユイ文相はこの措置の趣旨を、皇帝への報告書の中で次のように述べている。

「一八〇八年法令の立法者は、大学入学資格試験が、(一)中等学校生活の総括である、(二)中等学校の最上級の二学級教育内容についてのみ受験者に出題すべきである、と考えていた。しかるに近年、受験者は中等学校で履修したすべての事柄を死物狂いの丸暗記によつて、むりやりに理解しようとしているが、はたしてそのような必要があるだろうか。中等学校生活では教育によつて陶冶された精神能力が重要なのである。教育内容はそれほど大したことではない。

したがつて大学入学資格試験は、受験者の知性をややもすれば押しつぶしてしまう過重な負担、つまり詰め込まれただけのほとんど未消化な知識よりも、むしろ受験者の能力(資質)を検証しなければならぬ。官公立学校教育団体は生徒を家庭、社会、国立専門大学校、公職へ送り出す前に、生徒がリセで実際に追求し獲得してきた学力を検証しなければならない。

ところで、そのような検証は莫大な量にのぼる、一時的な間に合わせの知識だけでよいであろうか。そうではない。それらの知識は教育の手段ではあるが、決して教育の目的ではない。教育の目的は人間思

想の教師との精神的交流によつて、生徒の精神を陶冶することである。実用的な専門知識はリセ以外の専門職業学校において獲得される。専門職業学校は技師、学者、法律顧問および医師を養成する。それに反して官立中等学校は人間を陶冶する学校である」(9, 117~118)。

要するにデュルユイ文相によれば、官立中等学校生徒の任務は単なる知識の蓄積ではなくて、研究方法を習得することである。したがつて官立中等学校生徒の学業の成果を認定する大学入学資格試験は、数日間であつてしまふ早咲きの知識を検証するのではなくて、偉大な人間精神の著書および科学的方法との内面的交流によつて陶冶された、真の思考力、作文力、会話を検証しなければならないのである。

二 文学大学入学資格試験

一八六四年一月二七日付布令は、上述のような教育理念に基づいた論理的結果であつた。修辞学級または哲学級の教科に関する全国学力競争大会において、優等賞を獲得した文学大学入学資格試験受験者は文学試験を免除された。また理科系科目に関する優等賞を獲得した科学大学入学資格試験受験者も科学試験を免除された。

実際、全国学力競争大会は博覧強記の競争でもなければ、記憶力の競争でもない。それは受験者が真なるもの、美なるものに対してもっている強固な思考力と確実な鑑賞力、またあらゆる専門教養の基礎として役立つ一般的知識を順序正しく、上品かつ明確に熱情をこめて表現する能力を検証するための試験である。

もちろん、デュルユイ以前の歴代文相は、大学入学資格試験が、(一)

知性の眞の発達よりも、むしろ丸暗記の努力を検証する傾向があること、(二)巧妙な受験準備屋の授業と一夜漬けで詰め込まれる受験参考書の型にはまった解答の丸暗記という価値しか認めていないことを遺憾に思っていた。しかし、かれらはこのような欠陥を是正する措置をとることができなかったのである。

デュルユイ文相の功績は、クルノが大学入学資格試験の廃止という悲劇的な措置もやむをえないと、さじを投げた時ですら、このような欠陥を是正する有効な措置をとったことにある。かれは大学入学資格試験の内容と方法を簡素化し、試験の有効性を増すために一段と強化したのである。

デュルユイ文相による改革の特色は、第一に第1表(9.456)に示す通り、筆記試験の増大である。筆記試験の配点指数も増大された。第二に哲学級と修辞学級の教育内容に関する口述試験の削減と、出題指定著作家一覧表の発表廃止。第三に番号ごとに変る試験内容の分類法と、これらの出題番号のくじ引きによる決定方法の廃止である。

筆記試験が口述試験よりも確実であることはいうまでもない。クーザン文相は筆記試験を強化することに専念した。かれによれば、「筆記試験は眞の知識の最良の保証である。それは受験者に諸教科について合格点を配当する。それは合否判定者に判定意見がどれくらい正当であるかを確実に示すことができる。それは生かじりの浅薄な知識しか持たず、わずかの丸暗記と、ヤマ賭けだけに頼っている受験者を排除するのである」(9.119)。

クーザン文相以後では、一三大学区が三科目の筆記試験問題を出題

第1表 文学大学入学資格試験(1864年11月28日規則)

試験種別		試験科目	試験時間	配点指数		備考
				1864年	1870年	
筆記		(1)ラテン語作文	4 (時間)	3	1	1870年3月19日付規則により、配点指数は一部修正。
		(2)ラテン語仏訳	2		1	
		(3)哲学論文	3		1	
口述	解釈	ギリシア語	45分	2	3	修辞学級所定著作家を対象とする。
		ラテン語				
	試問	現代外国語		1	1	受験者が予め希望した場合に実施する。
		哲学 歴史・地理学 科学 { 数学 物理学		1 1 2	1 1 1	

した。デュルユイ文相は、これらの大学区総長宛で一八六四年一〇月四日に「筆記試験に国語文による哲学論文を加えてよいか」という質問状を発送した。大学区総長はいずれも、「よいと思う」と回答した。この結果、筆記試験は量的に増加され、試験全体において重要な地位を占めることになった。

一八五七年八月三日の規則は筆記試験に一〇対二の配点指数による投票権しか配当しなかった。デュルユイ文相は筆記試験に九対三の配点指数による投票権を配当した。この措置によって口述試験は正当な限界内に戻された。その試験方法も一八〇八年当時の伝統的方法に復帰した。口述試験の出題内容は修辞学級と哲学級で履修した著作家の著書と教科の範囲に限定された。

このような試験方法のねらいは、(一)副次的なもののために本質的なものを見失ったりしないようにする、(二)大学入学資格免状の取得のために、中等学校での授業を放棄するおそれのある特別受験準備をする必要をなくする、(三)試験官に受験者の資質に関する判定上の参考資料を提供することにあった。

このような口述試験の改善措置は、第一に試験問題集の猛烈な準備学習を不必要にした。第二に試験問題のくじ引きによる出題方式の廃止によって、試験官に試験の自由、また生徒に学習の自由を回復させたのである。

一八六四年一月二八日付規則の厳格な実施は、古典課程中等教育の成功のための最大の障害物を消滅させることになった。当代では受験用虎の巻参考書は教科書に取って代ってしまっただけでなく、教師

と生徒の間にも侵入していた。それは生徒の自由な想像力、推理力、判断力および自由な立場からみた教養に対する愛着を抹殺していた。それゆえ口述試験の改善措置は古典課程中等教育の敵である受験用虎の巻参考書を消滅させたのである。なるほど試験問題集の利用と、くじ引きによる出題方式は受験者側からの厄介な解答や苦情から試験官を解放した。しかし、この利点は試験官の神望なる職務を汚す受験用虎の巻参考書の流行と、受験準備屋の繁昌という欠陥によって張消しになってしまったのである。

そのような試験方法のもとでは、官公立学校教育団体所属の教師は長期間にわたって、国民一般から疑惑の眼で見られがちであった。したがって、そのような試験方法の廃止はデュルユイ文相の輝やかな業績であったといつてよい。

デュルユイ文相の方針にしたがって、大学区総長一六人中の一四人、また学部長二二人中の一七人は甲、乙、丙の三段階評価方式を廃止した。そして新しく秀、優、良、可、不可の五段階評価方式を採択した。なお評価は、四、三、二、一、〇の数字で表示された。〇は受験者がある試験科目に無能力であることを示す。筆記試験三科目の中で一科目でも〇点取得者は、他の二科目がどんなに優秀であっても、試験委員会の合否判定会議において厳重に審査された。また試験全体の中で二科目において〇点取得者は、誰であっても不合格となった。

一八四七年以後、大学学部教授だけによって構成されていた試験委員会は、一八六四年一月二八日の規則第4条によって、大学区総長が文部大臣に推薦した者の名簿に基づいて選定された官立中等学校教

授資格者または博士号取得者によって補充された。

同規則第五条は受験許可年令を最低一六歳以上とし、例外を認めないことを規定している。この規定は少なくとも一部は一八〇八年当時の伝統に復帰したといつてよい。

同規則第一条は学部における大学入学資格試験の実施回数を年二回に戻した。試験開始時期は、文学大学入学資格試験が八月一日と十一月一日、科学大学入学資格試験が七月二〇日と一〇月二〇日となった。この二回の時期以外の、いかなる個人または団体対象の試験も廃止された。それまでの四月期試験は当該学年度の授業体制を混乱させていた。修辞学級在学生徒は第一回目の試験に落第しても、次の四月期試験に受験できたために、第二学級修了後の授業を放棄したからである。このような弊害を是正するために、試験の実施時期が年二回に改善されたのである。

三 科学大学入学資格試験

一八六五年三月二五日の規則は第2表に示す通り (附則第1項)、科学大学入学資格試験を文学大学入学資格試験と同じ形式の試験に戻した。科学大学入学資格試験から派生した、あらゆる寄生的大学入学資格試験は廃止された。ただし医学部進学者専用の科学大学入学資格試験だけは存続した。

このように大学入学資格試験の内容と形式は単純化された。しかし、まだ大学入学資格試験を中等学校教育課程に準拠し、それに対応させる問題が残っていた。一八六五年の政令はこの問題を中等学校教育

フランスにおける大学入学資格試験制度の近代化過程

第2表 科学大学入学資格試験 (1865年3月25日規則)

試験種別		試験科目	試験時間	配点指数		備考
				1865年	1870年	
筆記		ラテン語仏訳 数 学 物 理 学	2 (時間) 4	2	1 1 1	配点指数は1870年3月19日付規則によって一部修正。 筆記試験科目はリセ基礎数学級(第2年)所定教育課程を対象とする。
口述	解釈	ラテン語 国 語 現代外国語	45分	1	1 1	
		試問		数 学 物 理 学 歴 史 ・ 地 理 哲 学	2 2 2 1	2 2 1 1

教育課程の改訂によつて解決しようとした。中等学校教育課程改訂の基本的特質は、次の二点である。第一に各学級において文学教育と並行する科学教育を配当した。これによつて、生徒は修辞学級または哲学級修了時に、つまり文学教養の修得後でも容易に基礎数学級へ移行できるようなつた。第二に哲学級修了後に、あまり無理のない程度の補習によつて、生徒は文学大学入学資格免状と同時に、科学大学入学資格免状を他学級教育課程を履修しなくても取得できるようになつた。

これはまさにデュルユイ文相による改革の真のねらいであつた。デュルユイ文相自身が次のように説明している。「科学大学入学資格免状取得後に、生徒は理科系専門大学校入試準備教育を受けるために、リセ完全教育課程の本科である古典課程の四学級（第七、六、五、四各学年）を履修する。哲学級修了後に学業優等生は科学大学入学資格試験を受験できるのである。かれは理科系専門大学校入学試験も受験できることになる。しかし、この場合には周知のように、理科系専門大学校入学試験の合格はきわめて例外である。たとえばサン・シール陸軍士官学校入学試験には、通常では哲学級修了後、さらに一カ年間の基礎数学級での履修が必要である。また理工科^{ポリテクニク}学校入学試験の合格のためには、さらにもう一カ年間の数学専修級での履修が必要である。このような事情から考えると、いわゆる基礎数学級は哲学級修了生徒の理科系専門大学校入試合格を保証する、一種の補習学級である。この学級において、修辞学級修了生徒はいくらかは過去の既習内容を復習し、いくらかは新しい内容を学習することになる。

年長または飛躍進級によつて第三学級または第二学級修了後に文学級履修中止を家庭から許可された者は、以前では正規の第三学級教育課程履修証明試験後でしか、専門大学校入試準備学級へ進級できなかつたが、今後は直ちに進級を許可される。

実際、文学級履修によつて準備されるのでなければ、数学専修級の所定教育課程へ効果的に到達できないであろう。……しかし、そのような速成の、不確実な準備は年令や飛躍進級などのやむをえない事情の生徒にしか有効ではないであろう。速成受験準備教育によつて競争相手より先手を取ろうとしたり、まじめな学習から逃避しようとする者は、無惨な落第の憂目を見るであろうし、また自分自身が選択すべき生涯の中で、リセで獲得しようと思つた貴重な時間を確実に失うことになるであろう。

このことは大学区総長諸君が学校長および生徒の家庭に十分に理解させる必要がある。問題はそこへ万全の用意をもつて到達することにある。それゆえ、そこへ早く到達することは問題ではないのである」(9.123)。

要するにデュルユイ文相が制定した官立中等学校教育課程は、生徒の精神を文学系教科によつて発達させると同時に、科学的方法によつて補強するために、これまでよりも科学系教科と古典文学系教科を増加したのである。さらにこのような中等学校教育課程と中等教育修了認定試験とを相互に関連して運営するために、(一)哲学級修了後の文学大学入学資格試験、(二)文学系学級履修者と、専門職業本位の修辞学級履修者ならびに文学大学入学資格免状取得者が容易に進級できる数学

級履修後の科学大学入学資格試験、(三)理科系専門大学校入学試験の三段階の試験制度が組織されたのである。

四 試験 方法

デュルユイ文相は真に効果的な中等学校教育の維持は、大学入学資格試験の嚴重な管理に依存していることを、十分に認識していた。それゆえ一八六四年三月一八日に大学区総長宛に論文問題の管理に関する詳細な通達を發送している。

「大学入学資格試験の筆記試験の管理ならびに筆記試験の採点に関する大学学部間の比較検討の結果、本官はきわめて大きな格差が存することを発見した。ある学部は数字の誤まりを採点に算入したり、論文の文頭の觀察によつて採点をつけている。ある学部はそのようなことには無関心であつて、採点には全く關係がない。ある学部は採点成績を公表しているのに、ある学部は全くそれを公表していない。このように学部によつてまちまちな格差を避けるために、本官は諸君に対して、将来の学部の試験採点を一致させるための基準を定めたいと思う。

(一)鉛筆でなくペンで採点する。あらゆる誤答、たとえば、しばしば見過ごされているアクセントの誤答でさえ減点する。

(二)下線を引いた誤答について、誤答の理由(誤解、綴りの誤まりなど)を付記する。ラテン語翻譯の場合には、誤答の減点を数字で表示して、欄外に配点とともに並記しておく。論文の文頭にはこれらの配点数字の全部を記入し、各種の誤答(誤解、国語の誤まり、不純正語法など)

フランスにおける大学入学資格試験制度の近代化過程

を要約しておく。

(三)各論文の配点を記入しておく。また論文には成績順に配列した順位を記入する。

(四)学部での採点は、解答用紙の受験者氏名を隠すか、または封印した状態で行なう。もちろん、この措置は学部教授に対する不信とは別の事柄である。この措置は国家の学部教授に対する信頼に由来する公正とは別個の、公正の保証を国民一般に提供しようとするわけではない。

(五)いくつかの学部は受験者の氏名、洗礼名の記号を印刷した問題用紙を用意している。本官はこの慣行がいたる所で実施され、またその際、受験者が用紙に自己の氏名を記入することを要望する。この場合、受験者は問題用紙に自署し、氏名、洗礼名、生年月日、出生地を記入する。この方法は二人の大学入学資格試験受験者の中の一人が、同じ室内で他方の者の氏名で答案を書くというような、時々行なわれた不正行為を防止するのに役立つであらう。

また、この通達に示された一般的基準は科学大学入学資格試験における数学および物理学の筆記試験問題にも適用されなければならない(9, 124~126)。

デュルユイ文相は、試験問題の出題についても学部間の統一性を保持するための具体的な措置をとっている。かれは一八六四年一〇月二八日に大学区総長宛に試験問題の選定に関する通達を發送している。「本官は最近行なわれた文学大学入学資格試験受験者の筆記試験でのラテン語作文答案、また科学大学入学資格試験受験者のラテン語仏訳

答案を注意深く詳細に分析し、検討した結果、次期大学入学資格試験前に、ぜひ諸君に理解しておいていただきたい、いくつかの問題点が出てきたのである」(9.126)。

そしてデュルユイ文相は、受験者が試験問題によつて、むりな困難にひきずりこまれないようにすること、真に知的な学習を奨励するために、次のような原則を示している。

(一)ラテン語仏訳問題では、一個の全体を構成する文章、ならびに必要な困難な点が成句法の論理的関係の理解であるとか、思想的関係の指摘であるような文章を選定する。

(二)ラテン語作文問題に関しては、受験者に論拠として、また同時に模範文として役立つような、簡潔にして要を得た、正確な題材を出題する。

要するにデュルユイ文相は、大学入学資格試験に出題される原文および題材に対する周到な配慮と、正確な採点業務によつて、新中等学校教育課程の完全な実施とともに、中等学校教育水準向上の本質的条件である学部間での合否判定の平等化を実現しようとしたのである。

ところでデュルユイ文相のこのようなねらいは、完全に達成されたであろうか。大学資格試験制度が、これまでの長い伝統によつて蓄積してきた残滓を一朝にしてぬぐい去ることは、とうていできない。しかしデュルユイ文相の行政措置が大学入学資格免状に正当な価値を与え、中等教育の著しい隆盛をもたらしたことは否定できない。

五 デュルユイ文相の改革の結果

デュルユイ文相は一八六七年一月二一日に皇帝に対して、四年間にわたる教育行政の成果を報告している。「国立専門^{グラン・ゼコール}大学校入学者八三六人の中で、私立学校は多数の生徒と豊富な資産にもかかわらず、一八六七年度において一二七人、全体の一五%しか占めていない。私立学校はフランス国家の文学界、科学界、実業界の各界における一流の指導的人物を産み出す国立専門大学校、この真に入学困難な狭き門である国立専門大学校へは、ごく少数の生徒しか入学させることができなかった。そのうえ高等^{エコール・ノルマル・シュペリエール}師範学校へはただの一人も入学させていない。理工^{エコール・ポリテクニク}科学学校へは入学者一四五人中の一五人、高等工業学校入学者二三三人中の二三人にしかすぎない。

その代りにイエス社教団所属学校はサン・シール陸軍士官学校入学者三〇一人中の六九人を占めている。しかし、この成功はイエス社教団学校特有の有利な事情に基づいている。イエス社教団学校の有力な顧客である生徒の出身階層は、伝統的に職業軍人家庭なのである。かれらは家庭の方針にしたがつて軍隊にしか奉公しようとしていない。それゆえ、かれらは国家に奉公するのであつて、皇帝に奉公するのではない。かれらはいわゆる正統王朝派に属する家庭の出身者なのである。

しかし、本官はこの困難な点について、なんら悲観してはいない。本官は喜んで皇帝陛下に御報告したい。官立中等^{リセ}学校は本年度では昨年度よりも多い一、八七一人の生徒数を保持した。文理科履修分岐によつて人員の減少した修辞学級と哲学級は今期三、五六二人の生徒を

収容し、その中の一九三人は一カ年補習生徒であつた。

各学部長は教育状況について全員一致で、次のように報告している。全盛期の中等学校教育水準へまで回復した。ある方面では、中等学校教育は全盛期の教育水準を越えているのである」(9, 126~127)。

皇帝は、この報告を受取る前に、デュルユイ文相に対して、「数学専修級教育は古典課程中等教育に被害を及ぼしていないか」(9, 127)と警告した。これはまた、宗教団体経営の学校がデュルユイ文相の教育行政措置に対して浴びせた激しい攻撃の口実であつた。

デュルユイ文相の中等学校教育課程の改革、大学入学資格試験の再編成などの行政措置はクーザン文相時代の教育課程および教育法規の改革の時と同じくらしい激しい攻撃を受けたのである。試験委員会の筆記試験答案採点に対する反対運動は、一時鎮静していたが、再び燃え上つた。この運動は大学入学資格学位授与権を国立大学から剝奪して、官私混成委員会にそれを移譲せよと要求した。

当代の私立学校擁護論者ラプラドは、フランス学校制度の教育学的研究の結果、国家直轄中等学校と宗教団体直轄中等学校が青少年の魂を押しつぶしてしまうような教育を課している状態を訴えた。かれは児童青年に対する愛情に立脚した教育学によって、古代ギリシア教育の模範に帰れと呼びかけた。

ラプラドはデュルユイ文相の大学入学資格試験の改革は、文相自身が述べている改革の原理とは全く一致していないと猛烈に非難した。

「万人が大学入学資格試験問題について、文相と同じように考えている。なぜなら現在のわが国の大学入学資格試験受験者は、とても億

え切れないほどの膨大な文学と科学の問題に取り組まされている。また最近の試験科目は表面的には、あらゆるものすごい準備勉強をやめさせ、簡素に整理されたといわれている。しかし実際には試験は強化され、ますます困難な厳しいものになっている。その結果、最近数カ年の試験科目の範囲と内容の膨大化は、ますます救い難いものとなり、受験者は過重負担にあえいでいる。これは、まさに栄光ある現代における受験準備教育の真相である。

換言すれば新鋭の軍隊を創設しようとする政府はすべて口では緊縮財政を唱える。国民の税金負担が耐えられなくなればなるほど、ますます緊縮財政が声高に叫ばれる。わが国の大学入学資格試験の試験科目は今日の公共事業と民間産業を等しく支配している、このような風潮を反映した法則によって、これまでたえず口では縮減を唱えながら、実際には増大するばかりであつた。

とりわけ最近数カ年では試験科目が改定せられた。古典課程中等教育とは全く無縁な新思想が、この改革を指導したのである。一八六四年の科学に関する試験科目は、そのような新思想に影響されて、縮減されるどころか拡大されたのである。文学大学入学資格試験の科学部門は口述試験を除くと、以前の通りに存続した。ラテン語とギリシア語は賢明にも尊重された。哲学、国文学は存続した。すでに量的に拡大していた歴史学は際限もなしに増大した。

なるほど試験問題集の簡素化によって、試験問題集は確かに減少した。しかし、肝心なことは新形式の試験問題の一題が、旧形式の試験問題の一〇題に相等するというではないのか。実情はまさにその

通りである。

しかるに最近の文学大学入学資格試験の試験科目は、旧試験科目の範囲と内容にとどまったままであり、決して十分なものであるとはいえない」(9, 37~41)。

要するにラブラドのねらいは古典課程中等教育と文学大学入学資格試験の擁護であつた。ラブラドの教育観の要旨は、次の通りである。

(一)工業、商業など実業学校における科学(実学的教科)の進出に対応して、官立中等学校における古代文学教育を元の状態に戻さなければならぬ。古典教育を擁護するためには、それ以外の教科はすべて放棄する必要がある。

(二)ギリシア語、ラテン語教育のみが児童を永遠の理性に導き、また人間性の本質を理解する感情を陶冶する。文明社会の最初の理解者である古代のギリシア人とローマ人は、そのような感情を比類のない正確さ、単純かつ新鮮さで表現することができた。かれらの学校は青少年にとって論理、美、雄弁、道徳および英雄的行動の最良の学校である。

ところで、ラブラドは古典課程中等教育が十分に行なわれるためには、古典以外の実学的教科も全く無視するわけにはいかないという立場をとっていた。なぜなら古典課程中等教育の目的は、知識の獲得よりも、むしろ知性の陶冶にあつたからである。まず第一に家を建築し、その後で家具を備えつけることになる。文学大学入学資格試験の受験者は弁護士、司法官、不動産所有者、銀行家として、商業経済および家政に必要な、ある程度の計算力を持つていなければならない。

また、かれは幾何学も知っている必要がある。これは人類の教師プラトンが、「幾何学を知らざる者は、この門に入るべからず」と言っていることから明らかである。かれは物理学、化学が人間知識の全体系の中で占める地位と重要性も理解できなければならない。そのほかの教科に関しても同じである。

ところで、このことは文学大学入学資格試験の受験者から文学の学習時間を奪い取らないようにして行なわれなければならない。古典文学の学習は、他のあらゆる実学的教科の学習よりも優先権をもつのである。

ラブラドによれば、歴史科教育は現代の事柄を取り扱わないのである。古典課程の教育において、現代の事件の説明を入れることは、青少年の感情を混乱させてしまうからである。歴史科教育は生徒自身が直接経験したことのない、過去の時代の人間を取り扱うのである。それゆえ、ラブラドは歴史科教育を高等教育に保留している。かれは中等学校における歴史科教育の導入は、良好な中等教育にとって不幸な措置であると考えていた。中等学校にふさわしい歴史教育は、文学担当教師が文学教材の註釈と説明の際に、歴史的背景について有益な説明をする労をいとわないならば、文学担当教師だけで十分間にあうと考えられた。中等学校生徒が履修する必要のある歴史授業は、第七学級ではピリスで始まり、修辞学級でのホメロス、ソフォクレス、ツキジデス、プラトンならびにビルゲリウス、キケロ、タキツスで終るのである。

ラブラドの見解にしたがえば、現代外国語は、(一)学問研究の重要な

道具であり、(二)情報収集の貴重な手段であり、(三)すぐれた知性のあらゆる教養の補充手段である。ただし、それは古典語を母体とした言語であつて、古典語のように一般教養の土台になることはできないのである。したがって現代外国語は授業時間にゆとりがある場合にだけ選択科目としての地位をもつにとどまるべきなのである。それに反して古典語は官立中等学校^セの主要な必須科目としての地位を保持すべきであると考えられた。

かくしてラプラドは文学大学入学資格試験ならびに古典語教育の擁護のために、デュルユイ文相の中等学校教育改革に対する反対運動を展開した。教育界の一部の識者はデュルユイ文相の改革に賛成意見を表明した。しかし大多数の教師と家庭の親たちは一八六四年度の中等学校教育課程が、それ以前の教育課程以上に百科辞典的であるというラプラドの主張に愕然としたのである。かれらは、大学入学資格試験の受験生を押しつぶさんばかりの過重負担に憤激した。かれらはノデイエの「追想」の中の一節を思い出したのである。監獄に長い間閉じこめられていた囚人が不意に自由の身となった。世間へ出たばかりの初め数日間、かれは何か欠けていることに気づき、それが刑務官であることを発見したという一節である。

デュルユイ文相が一八六四年に突然にこの刑務官、つまり老大な試験科目の内容の一部を廃止した時、官立中等学校の教師や生徒、また試験官を襲つたのは、そのような感情であつたと考えられる。人間は一朝一夕には、なかなか古い偏見や慣習を廃止できるものではない。番号順に分類された五〇〇題の試験問題集の亡霊は、一八六四年の改

革後も依然として試験官や受験準備教師、また受験者につきまといたのである。

元リオン大学文学部教授であり試験官であつたラプラド自身、次のように述懐している。「わたくしは中等学校教育課程の中へ取捨自由の選択科目が入つて来た時、当惑の気持で一杯であつた。試験の時には、わたくしは自分が自家菜籠の物にしていた教科内容から、たとえバリクルグスについて受験者に試問した」(913)。しかるに、リクルグスは一八六四年以後の中等学校の哲学級と修辞学級の教育課程からは、もはや姿を消していたのである。ラプラドでさえ、このような始末であつた。それゆえ、その他の教師がこれまでの慣行にしたがつて大学入学資格試験を実行したのは言うまでもないであらう。

したがって、魔法の棒の一撃によつて、試験官や受験者の精神を覚醒させ、これまでの慣行を一変させたデュルユイ文相を、「ほら吹き」とか「山師の天才」と呼ぶのは当を得ていない。立派な教育法規は実行されてこそ、初めて賞讃されるのである。同様に教育改革は法令として公布、施行された後でしか実効を発揮できない。教育改革の効果が見えてくるためには、忍耐強い不断の努力とともに、改革自体のあらゆる長所と短所が持続されるための長い時間が必要なのである。

しかるにデュルユイ文相は在任僅か一カ年間で辞職した。デュルユイ文相が制定した教育制度に対する反応が、政治体制の変革だけでなく、事態の自然の成行きによつて起つてきた時には、かれはもはや文相の地位から去つていた。一八七〇年の普仏戦争は、もはやデュルユ

イ文相の改革路線に沿うた教育実験を遂行していくことを許さなかったのである。

六 デュルユイ文相の改革の影響

(一) シモン文相の場合

シモン文相はデュルユイ前文相の教育改革に対して敬意を表明していた。かれは一八六四年の文学大学入学資格試験、また一八六五年の科学大学入学資格試験に関する規則は、生徒に知的労作に対する愛着、教師に人間陶冶に対する情熱を発達させるのに最適のものであると考えていた。また、それは生徒と教師から、大学入学資格試験という圧迫観念を取り除く教育制度であると考えられていた。

チュール大統領から教育行政の全権を委任されたシモン文相は、中等学校教育制度をデュルユイ前文相の路線に沿うて維持して行こうと考えていた。しかし一八七〇年の敗戦はフランス指導者階級の無能ぶりを如実に示した。これまでの指導者階級が受けてきた教育に対する批判もきわめて活発となった。

多数のフランス人は、ドイツの勝利の原動力はプロシアの小学校教師階級であると考えた。この点について、ベイユは次のように述べている。「教育に無関心な、多くの大衆は眼に見えたり触れたりした結果しか考えないものである。国民大衆は軍隊の士官たちがドイツ人あまり知っていないことを、自分自身の眼で確認した。フランス人は現代外国語をもっと学習しなければならない。わが国の軍隊の幕僚は

地理にうとく、ひどい感違いをしたり、地図を利用することすらできなかった。かれらは地理を学習しなければならない。これらの端的な事例は、政府が現在何をしなければならないかを明白に示している」(2, 154)。

戦鬪的旧教信者^{カトリック}はセダン敗戦の責任者である軍隊士官を養成した官立中等学校^{リセ}の教育に批判を集中した。かれらは、当時の国民大衆の間に広まっていた士官不信の雰囲気の中で、それを官公立学校教育反対闘争の新しい突破口にした。とりわけカトリック強硬派の機関紙「キリスト教徒教育評論」は、国家教育団体である官公立学校教育団体はセダンで致命的打撃を受け、もはや最後のとどめを刺すばかりになっていると宣伝してはばからなかった。同誌第一号(一八七一年五月号)は次のように論じている。「いまやわが国の敗戦の真の犯人が、だれであるかを知る必要がある。プロシア軍参謀の科学教養に比べて、わが国軍隊の士官がかくも科学に弱い原因は、いったいどこにあるのか」(9, 13)。同じような抗議は自由主義的旧教信者側からも行なわれた。

国家の新しい要請に対応するよりほかに、何らの政治的野心ももたないパスツールのような学者でさえ、フランスに最も不足している有能な人材を養成しうる教育制度が必要であると、世論に訴えた。

公平な第三者からの、まじめな批判はシモン文相に決定的な影響を与えた。シモン文相の顧問であるブレアルは、世論の圧力のもとに、一八六五年のデュルユイ前文相による教育改革の実施を挫折させた、いろいろの要因を究明する報告書を文相に提出した。ブレアルの見解

によれば、「一八六四年の改革はすぐれたものであった。しかし、それはわが国固有の欠陥によって、ついに実を結ぶに至らなかったのである」(9, 133)。

一八七二年におけるシモン文相による中等学校教育課程の改革は、デュルユイ前文相制定の教育課程については、哲学級に年間六時間の保健科目を配当した以外には、なんらの新しい内容も補充しなかった。それは中等学校の全学級において、歴史、地理、現代外国語を必須科目に格上げして強化した。そのためにラテン詩を廃止し、ラテン語仏訳を削減した。それ以後の中等教育では、「現代外国語を話し、ラテン語を読む」(2, 159) ために学習が行なわれるようになった。

この改革の実際のねらいは、教育方法だけの改革にあった。シモン文相は、デュルユイ前文相が敷いた路線に沿うて、時間という経験のみが示現しうる改革を、適時に遂行していこうと考えた。そのため、かれはとりあえず中等教育界の混乱を収束するために、確固たる教育学的原理に基づいて、官公立学校教育と私立学校教育との共存と調和を図ろうとしたのである。

シモン文相は、デュルユイ前文相が制定した大学入学資格試験制度についても、なんらの修正も加えなかった。しかし、かれは文学大学入学資格試験を、「修辞学級修了後に満一六歳以上の者が受験する第一部試験と、哲学級修了後に受驗する第二部試験とに分割する」(10, 300) 法案について、パリの中等学校長に対して質問紙調査を実施した。この二つの試験は一カ年間の学業に応じて区分されていた。第一部の試験科目は文学、歴史学、地理学であり、また第二部の試験科目は哲

学、科学、現代外国語であった。大学入学資格試験二分制法案は一八七三年五月二四日に諮問委員会によって、満場一致で可決された。

バビ文相はシモン前文相の法案を、公教育高等評議会へ再度提出した。公教育高等評議会第二委員会は、デュパンループを報告者に指名して、シモン前文相の法案を審議した。デュパンループは三年以上も論争されてきたシモン法案を支持する熱弁をふるった。かれの報告書はパリのリセ各校長によって支持され、またシモン法案の趣旨を十分に尊重していた。

しかし、かれはシモン法案が世論と時間の洗礼を受けていた事実を見落していた。そのため、かれの報告書の中にはシモン前文相の名は一度も登場しなかったのである。けれども、かれがシモン法案を通過させるために援用した理論的根拠は、すでにシモン前文相が採択していたものと同じであった。

大学入学資格試験の二分制制の教育的価値は予期しなかったほどの、多大の利益をもたらした。中等学校の修辞学級と哲学級は、各学級における直接の履修教科の内容について認定を受けることになった。このことによって修辞学級と哲学級の授業は単純化され、生徒の能力に一層対応できるようになった。

また、この二学級に配当された教科の授業は徹底的に指導されることになった。さらに、そのように限定された試験は範囲で失ったものを、内容面の深さで取り返すことになった。狭い範囲の内容を徹底的に学習できるリセ生徒は、受験速成予備校の暗記万能的な、詰め込み教育よりも、リセでのゆったりとした系統的な受験準備教育に全力を

傾倒するようになった。

デュパンループは、この改革によって、これまで修辞学級または哲学級の授業を履修せず、また全く出席しないで、大学入学資格試験を受験していた受験者を閉め出すことができる」と期待していた。かれの報告によれば、一八六七年以後のリセ・アンリ四世校と、リセ・シャルルマーニュ校出身の受験者の半数は哲学級未修了者であった。リセ・サン・ルイ校とリセ・ベルサイユ校出身の受験者の場合には、その三割強の者が哲学級の未修了者であった。リセ・ルイ大王校の一八六二年から七二年までの一〇年間の受験者四三三人中の二三〇人は、修辞学級修了後に大学入学資格試験を受験していた。

デュパンループは、このように中等学校哲学級が半身不随となり、がたがたになってしまっている現状を不満に思っていた。しかし、このような嘆かわしい現状の原因がデュルユイ前文相の改革にあったという、かれの見解には同意できない。

大学入学資格試験の過重な要求に直面した受験者は、修辞学級と哲学級の授業を放棄したが、それは一八四九年の布令による官立中等学校修了証書提出義務廃止の、当然の帰結であったのである。それは、大学入学資格試験が知識の根源ではなく、ただ知識自体だけを評価するべきであるという理由によって、試験に苛酷な要求を押しつけ、官立中等学校修了証書を廃止した措置の、当然の結果であったといわなければならない。

一八四九年以前では、すべての受験者が修辞学級と哲学級の履修証明書を提出しなければ、大学入学資格試験を受験できなかった。した

がつて、デュパンループは官立中等学校修了証書の廃止措置による結果から、政治と教育を混同した時に生ずる不利益について、有益な教訓を読み取る必要があったと考えられる。つまり、かれは教育行政において、正しい教育学のすじ道を通すことが、いかに重要であるかということを洞察する必要があったのである。しかるに、かれはこれまでの歴代文相の行政措置に対して、見当違いの責任を負わせたのである。

デュパンループは、歴代文相のやり方にならつて、大学入学資格試験を中等学校生徒のふるい分けの機会として利用することを支持している。かれは、所定の試験日にだけ精神的負担を負わせるだけで、試験後にはすっかり忘れ去られてしまうような、ごちゃごちゃとして、まとまりのない観念の、百科辞典的な知識を検証するだけの大学入学資格試験に対して反対している。かれの見解によれば、負担過重な、細分化された大学入学資格試験は、受験者の知性を一種の丸暗記の安売所に変質してしまっただけである。それは、なんらの関係もない観念を、無秩序に詰め込むようにするだけにすぎない。それは教師に受験準備の補習教育をするように強制する。それは、多くの生徒に対して、教科書を捨てて受験用参考書に走らせたり、知識を詰め込むために、肝心の真理探究の意欲を抹殺したりするのである。結局、デュパンループは、「われわれは人材を求めているのに、実際には大学入学資格免状取得者しか供給されていない」(9.138)と結論を下したのである。

ところで、デュパンループの批判は、デュルユイ前文相が中等教育

と大学入学資格試験を改善して、国家に対して大学入学資格を具備した人材を供給しようとしたにもかかわらず、その努力の成果が実るためには、時間の経過が必要であつたという点を見落している。それゆえデュルユイ文相の改革が青少年の知的水準を低下させ、大学入学資格取得者だけを養成したにすぎないという、デュパンループの非難は当を得ていないというべきである。もちろん、当代の大学入学資格取得者は柔弱な足と、ごちゃごちゃした観念で重苦しくなった頭とによつて、健全な発育を阻害されていたといつてよい。しかし、それは決してデュルユイ文相制定の教育課程の産んだ空洞ではなかつたはずである。同じ理由から、中等学校における古典語教育の衰退も、一八六五年のラテン詩の廃止措置に負わせることできない。

(二) ド・クモン文相の場合

前述のようなデュパンループの批判は、ついに第3表(9,492)に示すように、一八七四年の文学大学入学資格試験二分制法令に結実した。さらに、それに一八七四年の中等学校教育課程を産み出したのである。

文学大学入学資格試験を修辞学級修了後の第一部試験と、哲学級修了後の第二部試験とに分割する改革は、良好な結果をもたらした。ド・クモン文相は一八七四年八月五日にリセ・アンリ四世校において、新中等学校教育課程の制定趣旨について、次のように述べている。

「諸君、わたくしは公教育高等評議会の協力のもとに、わが国古典語教育の伝統のある、経験豊富な学校における学習方法を復活する新

第3表 文学大学入学資格試験 (1874年7月25日規則)

試験種別		試験科目	試験時間	配点指数	備考
第一部	筆記	ラテン語仏訳	2(時間)	1	得点は 5(秀) 4(優) 3(良) 2(可) 1(不可) 0(零) の6段階で表示し、 合格評点は 秀 良 可 の3種とする。
		ラテン語作文	4	1	
	口述	ギリシア語語	30分	1	
		ギリシア語語		1	
第二部	筆記	修辞学・古典文学		1	
		歴史		1	
	口述	試験問		1	
		哲学論文	4(時間)	2	
		現代外国語仏訳	2	1	
		哲学書および哲学史	30分	1	
	試験問	数学および物理学		1	
		物理学および博物学		1	
		現代外国語		1	
		歴史・地理		1	

教育課程を編成できたことを誇りに思っている。新しい試みは部分的には旧教育方法を廃止した。これまでの経験が必ずしも良好な成果をあげていなかったからである。もちろん、われわれはすぐれた構想の下に試みられた、いろいろな企てを採用してきたのであるが、必ずしも良好な結果を得ることができなかった。そのために歴代文相は大学入学資格試験の重大な改革を、つぎつぎと試みてきた。

わが国の青少年は、これまで文学大学入学資格免状を取得するためには、文学教育と科学教育の両方の、全部門にわたる試験問題に解答しなければならなかった。しかし、これは謬にもいうように、『二兎を追う者は一兎も得ず』になる。

わが国の受験者は、所定の試験日に文学と科学の両部門の全部の試験を、同時に受験しなければならなかった。そのため、かれらはいろいろな教科を、あちらこちらと生かじりのままに認識し、そのいずれもが消化不良の学習にとどまっていたのである。ある時は文学が科学のために軽視され、またある時には科学が文学のために粗略な処遇を受けた。

大学入学資格試験の二分割は、これらの重大な欠陥を是正するであろう。受験者は修辞学級修了時に、文学学業修了認定の第一部試験を受験する。つぎに、科学と哲学の履修に配当された一カ年間の修学後に、受験者は科学と哲学の専門知識を検証する第二部試験を受験する。

このようなやり方によって、われわれはわが国の生徒の精神を、文学と科学の両方を同時に学習するような、過大な負担を負わせて、押

し潰してしまったりしないようにしたのである。しかし、われわれは、このことによって、文学試験がこれまでより、もっと文学中心になると同時に、科学試験がもっと専門的になることを要求する権利を保有するのである（9:139-140）。

一八七四年七月二五日の政令は試験方法を規定したが、それはデュリュイ文相制定の規則の再版であった。たとえば試験合格条件、試験委員会の構成、試験の形式と期間、合否表決方法、試験監督などは同じであった。

ド・クモン文相は、中等学校における学年始期から終期までの正規の履修義務を免除するおそれのある便宜の提供を、できるだけ減らしたいと考えていた。それにもかかわらず、かれは大学入学資格試験の四月期特別試験を復活したのである。受験者全員が第一部試験の受験学部とは別の学部において、第二部試験を受験することができるようになった。

理工学校（リウキョウ）入学試験では、文学大学入学資格試験の第一合格証書取得者に五〇点の加算が認められた。また同第二合格証書取得者には、さらに二五点の加算が認められた。

一八七四年の布令による教育課程は、シモン前文相が廃止した文学演習を復活し、科学には副科目の地位しか配当しなかった。修辞学級までの教育課程では、科学としては算術と幾何学しかなかった。そのほかの科学教科では、哲学級になって始めて、物理学と化学が登場した。博物学は第二学級で初歩が教授され、哲学級では、さらに深く教授された。このように科学の地位は低下したが、それでも科学の日進

月歩の発達に対応するために、たえず補充が行なわれなければならないのであったのである。

歴史はあまりに細部にわたる事柄は削減された。現代外国語はこれまで正規の教科目として採用されていなかったが、新教科目として、やや分不相応なくらいの多くの配当授業時数を獲得した。

シモン前文相は、このようなド・クモン文相の改革に関して、次のように批判している。「わたくしは大学入学資格試験の試験科目について、いくつかの補充と削減を提案した。ところが補充科目が維持され、削減科目は廃止された。これは最悪の解決であった」(9,142)。

実際、中等学校教育界の実情は、一八七四年の改革による期待に全く反した状態にあった。「詩文の単調な郎読。元老院使者がシーザーにルビコン川を越えないように懇願する、永遠の演説についての無味乾燥なラテン語添削指導。ホメロスとホラチウスの作品を、始めから終りまで国語で逐語訳していく訳読。かくして最終学級では五〇人の生徒の中で、活発な学習活動をしているのは、わずか六人でしかなかった」(9,142)のである。

一八七四年のド・クモン文相による改革がもたらした混乱は、旧教育学の新教育学に対する勝利であり、古典系教科優位の旧文学大学入学資格試験の復活を示すものにほかならない。なぜならデュルユ文相による大学入学資格試験制度改革のねらいは、文学教養と同時に科学教養を保証することにあったからである。したがってド・クモン文相の改革は、大学入学資格試験制度の近代化路線よりみれば、前進ではなく後退したものといわなければならない。その結果、それは中等

フランスにおける大学入学資格試験制度の近代化過程

教育界の現場に、いろいろな混乱をひき起こしたのである。

(一九七二・七・三一)

参考文献

- (1) Durkheim, E., L'évolution pédagogique en France II, 1938.
- (2) Gal, R., Histoire de l'éducation, 1953.
- (3) Gerbod, P., La condition universitaire en France au XIX^e siècle, 1965.
- (4) Glatigny, M., Histoire de l'enseignement en France, 1949.
- (5) Liard, L., L'enseignement supérieur en France III, 1888.
- (6) Léon, A., Histoire de l'enseignement en France, 1967.
- (7) Léon, A., Histoire de l'éducation technique, 1968.
- (8) Palméro, J., Histoire des institutions et des doctrines pédagogiques par textes, 1952.
- (9) Piobetta, J. B., Le baccalauréat, 1937.
- (10) Ponteil, F., Histoire de l'enseignement en France, 1966.
- (11) Simon, J., La liberté de conscience, 1857.
- (12) Weill, G., Histoire de l'enseignement secondaire en France, 1921.
- (13) デュルケイム、フランス教育思想史 下、普遍社、一九六六年
小関藤一郎訳
- (14) A レオン、フランス教育史、文庫クセジュ、白水社、一九六七年
池端次郎訳
- (15) A レオン
もののべながおき訳、フランスの技術教育の歴史、文庫クセジュ、白水社、一九六八年

【備考】文中の()内の数字は文献番号と、文献の引用頁数を示す。